

男鹿半島北岸安田付近に打ち上げられるオキシジミガイ

渡部 晟*

Cyclina sinensis thrown up on the shore of Anden,
Oga Peninsula, Akita Prefecture, Japan

Akira Watanabe*

オキシジミガイ (*Cyclina sinensis*, 二枚貝綱・マルスダレガイ科) は秋田県に生息していないといわれていた(西村, 1957)が渡辺(1976MS)のリストに登載され, 現生している事実が知られるようになった。また本種は, 秋田県内の完新統や貝塚から比較的豊富に産出する場合があります, かつては秋田の海で相当に繁栄したこともあったと考えられる。

そのほか, 非常に稀ではあるが, 男鹿半島北岸安田付近の砂浜に本種の殻が打ち上げられていることがあり, これまでに筆者はそれを数回目撃した。この付近では従来本種はまったく知られていなかったため, 本稿でこの事実を報告するとともに, これを機に秋田県内から報告されているオキシジミガイの記録を整理し, あわせて打ち上げられる殻の起源を考察してみる。

I 打ち上げられたオキシジミガイの殻

オキシジミガイの殻が打ち上げられる位置を図1(⑤)に示した。これまでに筆者はここで3個の殻を採集した。いずれも右殻であり, 大きさは殻高がそれぞれ, 48・59・65mmの成殻である。この内, 殻高48mmと65mmの個体を図2に示した。

3個の殻は共通して外形をとどめてはいるが, 殻皮はまったく保存されておらず, 腹縁内面の刻みや殻表の彫刻が認められなくなる

ほど磨耗が進んでいて, 表面は白っぽく風化している。

II 秋田県におけるオキシジミガイの記録

これまでに秋田県内で記録されたオキシジミガイについて, 表1にまとめてみた。それぞれの産地は図1に示した。以下に簡単に解説する。

現生(表1の②, 以下同じ)は, 男鹿市椿で知られているだけである。本種の生息場所は, 一般的には内湾奥の潮間帯泥底といわれている(松島, 1984など)。それに対して椿では広く磯浜が発達しているため, オキシジミガイに好適な生息環境が備わっていないように見える。したがって個体数も少ないと思われる。渡辺(1976MS)のリストには「稀」と記されている。

角間崎貝塚(①)は縄文時代前期といわれる遺跡で, 多量の貝を出土したが, その中でオキシジミガイはヤマトシジミに次いで2番目に個体数が多い種である(西村, 1957)。この貝殻の¹⁴C年代は4,630±240y.B.P.と測定された(渡部・磯村, 1996)。本種を含む角間崎貝塚産の内湾種は, 八郎潟の前身である内湾から採取されたものと考えられている(西村, 1957; 渡部, 1992)。

象潟町産(③)の本種は, いずれも象潟層(大沢ほか, 1982)から産出したものである。

*秋田県立博物館 Akita Prefectural Museum

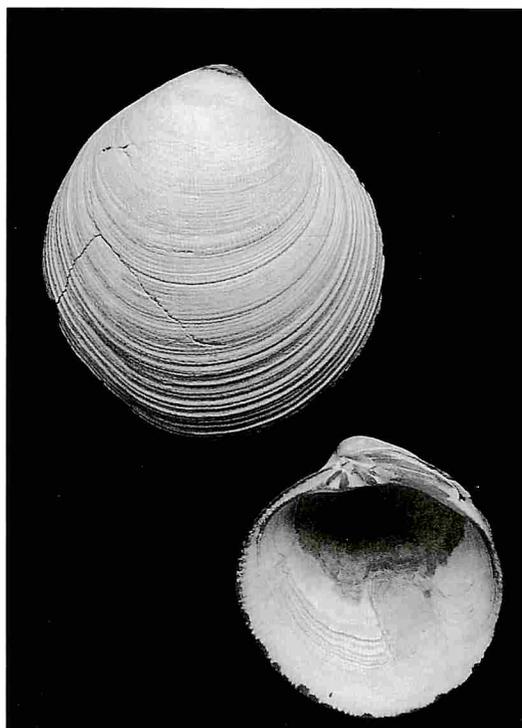
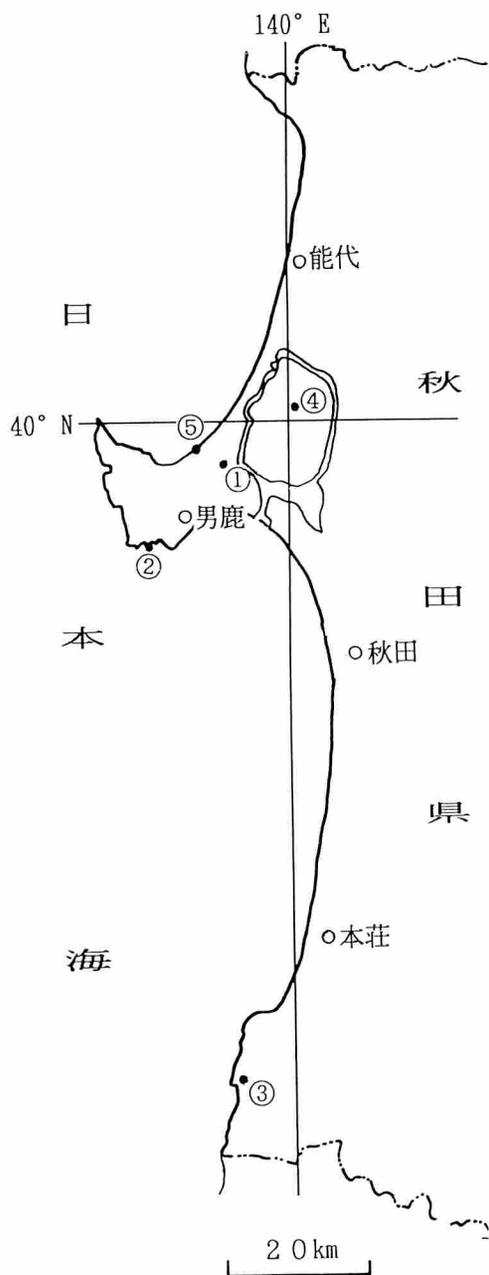


図2 安田海岸に打ち上げられたオキシジミガイ
殻高：上65mm，下48mm

図1 秋田県におけるオキシジミガイの産地
(①-⑤)
これまでに知られた秋田県におけるオキシジミガイの産地をすべて記した。
①-⑤は表1と共通。

表1 秋田県におけるオキシジミガイの記録

No.	産出場所	文献	摘要
①	若美町角間崎	西村 (1957)	角間崎貝塚から出土
②	男鹿市椿	渡辺 (1976MS)	現生
③	象潟町	渡部 (1979 a), 渡部・佐藤 (1980)	象潟層産
④	大潟村	渡部 (1994)	八郎潟層産
⑤	男鹿市安田	本稿	砂浜への打ち上げ

象潟層は1804年の象潟地震によって隆起し陸化した内湾（この内湾を“象潟”と呼んでいた）の堆積物であり、オキシジミガイは“象潟”が陸化するまでそこに生息していたと考えられる。

大潟村（④）から発見されたオキシジミガイは、八郎潟層（白石，1990）に含まれていた。八郎潟層は八郎潟とその前身である水域に堆積した完新統である。オキシジミガイの殻は干拓工事に伴って地下から掘り上げられ、地表に散乱していた状態で採集されたものであるため、産出層位は明確でないが、8000～7000年前程度の年代が推定されている（渡部・磯村，1996）。

III オキシジミガイの殻の起源

安田海岸に打ち上げられたオキシジミガイは、先述したように、いずれも片殻になっており、著しく磨耗を受けている。このような保存状態と、付近に本種の生息に好適と思われる内湾などの環境が存在していないことをあわせて見ると、殻が打ち上げられるからといって、このあたりに本種が生息していると結論することはできないように思われる。また、もっとも近い生息場所である樺は、半島の南岸にあたり、そこから死殻が流送されてきたということもきわめて考えにくいことである。

以上のことから筆者は、このオキシジミガイの殻は化石であり、含まれている地層の浸食にともなって洗い出されたものとする。

オキシジミガイが打ち上げられる安田海岸には、貝化石を多産する更新統（鮪川層・安田層・潟西層）が露出しているが、これらの地層はオキシジミガイを含んでいない。したがって更新統を起源としたものでないことは

明らかである。

一方、このあたりの海岸にはハイガイの殻が多量に打ち上げられる（渡部，1979b）。その¹⁴C年代は $8,160 \pm 105$ y. B. P. と測定される（渡部・磯村，1996），化石であることが判明した。筆者は、打ち上げられるオキシジミガイはこのハイガイと同じ化石層に含まれているのではないかと推定している。ハイガイとオキシジミガイの生息環境は似通っており、化石として共に産出することも多い（松島・両角，1983；中川ほか，1993など）ので、両種が同一化石層に存在していると考えことに何ら不都合はない。両種が同じ場所に打ち上げられる事実も、同じ化石層に含まれていることを示唆するものといえよう。

なおハイガイを含む化石層は未だに発見されていないが、約8000年前は海面が現在より10～20m低い位置にあったので、海底に存在しているのではないかと考えられている（渡部・磯村，1997）。この化石層には、これら2種の他に、同じ湾奥の干潟群集の構成種であるマガキヤカワアイガイなども含まれている可能性が高く、安田海岸ではそれらの打ち上げも期待される。

謝辞：男鹿市の渡辺浩記氏には、現生のオキシジミガイにかかわる貴重な情報を御教示いただいた。心からお礼申し上げる。

文 献

- 松島義章，1984，日本列島における後氷期の浅海性貝類群集—特に環境変遷に伴うその時間・空間的変遷—。神奈川県立博物館研究報告（自然科学），15，37-109。
- 松島義章・両角芳郎，1983，大阪河内平野の海成沖積層から産出した貝殻の¹⁴C年代とそれに関連する問題。神奈川県立博物館研究報告（自然科学），14，1-9。
- 中川登美雄・福岡修・藤井昭二・千地万造・中村俊夫，1993，福井県大飯郡高浜町地下の高浜自然貝層。福井市自然史博物館専報，1（高浜貝層），1-113。

- 西村 正, 1957, 県内貝塚の貝について. 秋田考古学, 7, 13-17.
- 大沢 穠・池辺 穰・荒川洋一・上谷信之・佐藤博之・垣見俊弘, 1982, 象潟地域の地質(酒田地域の一部, 飛鳥を含む). 地域地質研究報告(5万分の1図幅), 地質調査書, 73p.
- 白石建雄, 1990, 秋田県八郎潟の地史. 地質学論集, 36, 47-69.
- 渡部 晟, 1979 a, 象潟平野の沖積層貝化石. 秋田県立博物館研究報告, 4, 99-102.
- 渡部 晟, 1979 b, 男鹿半島北岸に打上げられるハイガイについて. 秋田地学, 29, 1-5.
- 渡部 晟, 1992, 八郎潟の完新統産貝類化石と八郎潟周辺遺跡出土貝類の関係. 秋田自然史研究, 28, 58-60.
- 渡部 晟, 1994, 八郎潟の完新統産軟体動物化石群(その2). 秋田自然史研究, 30, 21-24.
- 渡部 晟・磯村朝次郎, 1996, 八郎潟及びその周辺地域における貝殻・木材の¹⁴C年代. 秋田県立博物館研究報告, 21, 37-46.
- 渡部 晟・磯村朝次郎, 1997, 秋田県男鹿・八郎潟地域における化石ハイガイ. 秋田県立博物館研究報告, 22, 45-50.
- 渡部 晟・佐藤芳和, 1980, 古象潟の軟体動物群. 秋田県立博物館研究報告, 5, 89-106.
- 渡辺浩記, 1976MS, 秋田県海産貝類目録.